

テーマ

介護に自由を

——元気なうちに話し合おう

コラム

実践女子大学 准教授

山根 純佳 さん



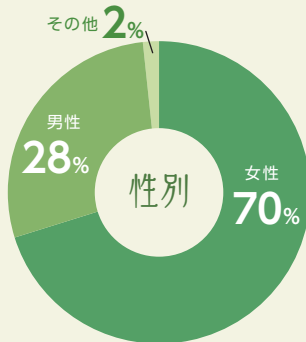
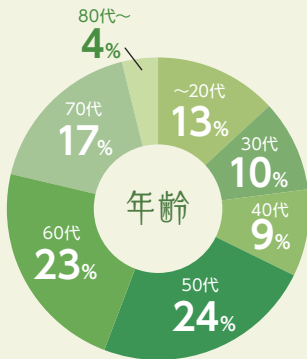
り
ぶ
る

さっぽろ

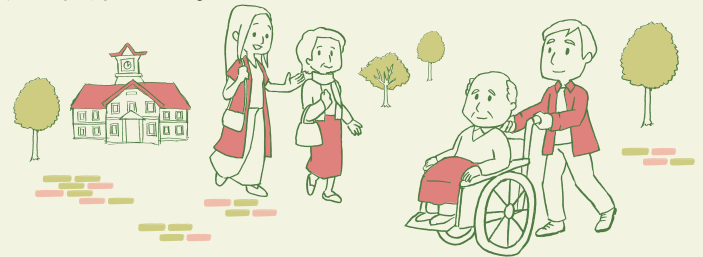
180名に
聞いた

札幌の介護事情

回答者について



札幌市男女共同参画センターの利用者をはじめ、札幌市内・近郊の方約180名にアンケートを行いました。アンケート結果から見た札幌の介護事情や介護に関する声を紹介します。



「配偶者・パートナーに介護をしてもらいたい」と答えたのは男性が2人に1人に対し、女性は5人に1人ほど。男性が「なんとなく」「一緒に住んでいるから」家族に介護をしてもらいたいと思う一方、女性は「身内に負担をかけたくない」「プロの方が割りきれる」といった理由で介護施設などを利用したいと考える方が多いようです。

● 生き続けるのが辛いと思わない介護がいい。
● 自分でできることは極力自分で挑戦させてもらえるような介護。
● 全く想像がつかない。できるだけ迷惑をかけたくない方法で。
● 家族には迷惑をかけたくないからピンピンこころをめざす！

コメント



女性

- 1位 介護施設 47.3%
- 2位 自宅(訪問介護など) 34.9%
- 3位 **配偶者・パートナー** **17.8%**

男性

- 1位 **配偶者・パートナー** **48.1%**
- 2位 介護施設 36.5%
- 3位 自宅(訪問介護など) 32.7%

※複数回答あり

理想の介護

Q

誰にどんな介護をしてもらいたいですか？

介護の経験があるかどうか

介護を経験した人

31.5%



- 1位 実親……………71%
 2位 義理親……………22%
 3位 祖父母などの親族……………22%

※複数回答あり

経験者の声

●大切な親と共に過ごした日々は辛いこともあったが、自分自身を見直し成長することができたと思います。「ごめんなさい」と「ありがとう」を繰り返した母に感謝の思いで過ごしています。やってみてわかることがたくさんあります。最初は戸惑いました。1人で抱え込まないで。

誰の介護をしましたか？

将来介護をすると思ったら誰の介護をすると思いますか？

将来介護を担うかもしれない人 70.1%

将来の介護について

- 親は「時期が来たら早く施設に入れてね」と言っています。自分は介護をしたいと思いますが、親の気持ちや負担を汲み取りたいのか悩む時があります。
- 自分の体力と精神が持つかどうか心配です。知識や経験がないので、講習などを受けたいです。
- 介護サービスやAIなどの利用も視野に入れて、負担の軽減を考えているので、特に不安はないです。
- まだ実感はないが、今回のアンケートで意識したいと思いました。

- 1位 実親……………60%
 2位 配偶者・パートナー……………53%
 3位 義理親……………22%

※複数回答あり

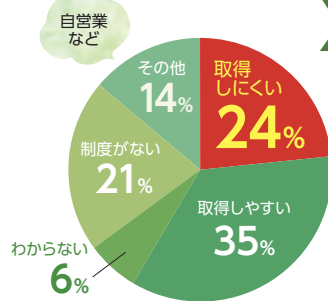
介護をした/する理由は「自分しかない」「自分でそう思っている」と回答した人が最も多かったです。子どもやその配偶者に介護してほしいと答えた人は男女ともに15%ほどに対し、親の介護を考えている人の割合は倍以上という結果になりました。

まとめ

今回多くの方から、介護に関するさまざまな思いとともに回答が寄せられました。回答を整理していくと、性別や「介護をする側」「介護をしてもらう側」の違いでまったく異なる結果となりました。「自分の介護は身内よりはプロに任せたい」と思う一方で、「自分しかないから」と家族の介護を担う覚悟をしている人が多くいました。しかし、よくよく見てみるとほとんどの人が「なんとなく」決めていました。「介護を頼んだ」と回答した人はいたものの、「介護を頼まれた」と回答した人は0%でした。「男女共同参画さっぽろプラン平成30年度実施報告書」によると、2010度からの6年間で家族介護者のうち、男性の割合が24%から31%に増加しています。また介護休暇を定めている企業も増加しています。「介護は家族がするもの」「女性だから自分がなくては」という思い込みを捨て、家族や会社など関わる人たちで一度話し合ってみるのはいかがでしょうか。

仕事と介護

介護休暇を取りやすい職場ですか？



※回答者のうち無職の方を除き、割合を算出。

コメント

●制度はあるが少数数の職場で取得しづらい。
 ●取得した人が周囲にいないとよくわからない。
 ●介護で仕事を辞めた場合、再就職が厳しそう。介護中のプランクが不利にならない会社になってほしい。



仕事と介護についての質問では、「仕事を続ける」と回答した人は42%でした。しかし、「介護休暇などを利用する」と回答した人はその半数にとどまります。

「介護休暇を取りやすい職場ですか」との質問に回答してくれた人のうち、4人に1人が「取得しにくい」と回答しています。また、制度についてよくわからない、気にしたことがなかった、という声もありました。

介護をめぐる意識に潜む

ジェンダー問題



みなさんは日頃、誰に介護してもらいたいと思っていますか？夫でしょうか、子どもでしょうか、それとも専門職でしょうか？介護に関する意識は、自分が「する側」になったときにも、「される側」になったときにも、ジェンダーの影響を強く受けています。

55歳以上の男女を対象とした内閣府の調査では、「必要になった場合の介護を依頼したい人」を「配偶者」とする回答は、男性は56・9%に対し女性は19・3%にとどまっています。また40歳以上の男女を対象とした調査では、「どこでどのような介護を受けたいか」という質問に対し、「自宅が家族中心に介護を受けたい」という回答は男性が24%に対し女性が13・9%と、男性のほうが専門家ではなく家族による介護を求めています。なぜ誰に介護されたいか、どこで介護を受けたいかをめぐる意識にジェンダー差が生じるのでしょうか。以下では介護をめぐる意識に潜むジェンダー問題について考えてみたいと思います。

女性のほうが専門職に介護を期待する要因のひとつとして、女性側の男性の家事介護能力への疑いあげられます。介護には料理や掃除といった家事のスキルが必要不可欠なため、家事を苦手とする夫や息子にお願いできない、というのわかりやすい感覚でしょう。ただし介護に必要とされる「能力」は家事のスキルだけではなく、日々変化していくニーズ（必要）を察知して臨機応変に対応していくスキルも必要です。「夫には自分の介護は任せられない」という感覚は、子育てや介護など他者の世話において求められる「感じる」ことが男性は苦手だという推測もあるでしょう。女性は自分が「介護」される側になったとき、「あてにならない」夫をとばして「娘」に期待をし、息子しかいない場合には専門職に期待すると考えられます。

介護をめぐる意識に潜むジェンダー問題のもうひとつの側面として、女性に比べて、男性は家のなかで「家族に世話されること」に慣れているという点があげられます。日本の男性の家事・育児時間が非常に短いことはよく知られていますが、これは男性（夫）が女性（妻）の労働に「依存」することで生活してきた、という意味です。自立を経済的自立ととらえるなら、より多く稼いでいる男性は「自立」していて、妻が「依存」しているように見えますが、生活や家事という面では、男性は依存的存在なのです。夫はこうした性別分業による「依存」の延長線上に「妻によって介護される自分」を位置づけることができます。

ひるがえって、常に家族に世話をする役割を背負ってきた女性は「家族に世話されること」に慣れていないので、家族に介護されることに「申し訳なさ」がつきまといまいます。少子化や非婚化により息子による母親の介護

男女平等、女性活躍が必要とされている現代でも「介護」となると、「嫁」「娘」が担うことが当然とされてしまっています。

どうしてそのような意識が生まれてしまうのかについて、

実践女子大学の山根先生にコラムを執筆していただきました。

も増えています。母親は老いても「息子を世話する」役割から逃れられず、息子に遠慮して自分の要求を伝えることができないという面も指摘されています。一方、相手が「ニーズを察知する能力」をもつ娘の場合には、母親は安心して依存することができます。

また「する側」におけるジェンダー化された関係性は、介護をめぐる「きょうだい間の分担」にも表れます。女性は、姉妹同士では介護の協力体制を築けるのに対し、男きょうだいは協力体制を築くのが難しく、男きょうだいが親と同居や近居をしている場合にも、遠距離介護を引き受けたり、親に対する罪悪感を感じることが明らかにされています。こうした女きょうだいの責任感や罪悪感は、女性がより「思いやりがあり利他的」であるからというより、上述の男性への「あてのならない」に起因するといえます。

このように介護関係には、夫婦間の分業、母親役割、娘、息子への期待の違いなどジェンダーにもとづいて築いてきた家族の歴史が刻みこまれているといえます。

では、どうしたら私たちは、ジェンダーから自由に「する側」「される側」になれるのでしょうか。若いうちから積極的に子育てをしてきた夫であれば、介護をお願いしたいと思えるかもしれません。妻に子育てや家事を依存してこなかった男性は、妻への依存ではなく専門職による介護を選ぶかもしれません。またきょうだい間での協働は、介護がはじまる前に女きょうだいに偏らない分担の仕方を話しあっておくのがよいでしょう。「あてにならない」なる前に「介護メンバーの一員であること」を自覚してもらい「あてになる」存在に変わってもらうことが大事でしょう。

もちろん男女とも「家族に介護されない自由」をもてることも大事です。誰もが家族（妻・娘）に依存しないで終生を過ごせる社会サービスの充実が求められます。

※1 内閣府「高齢者の健康に関する調査」(平成29年)

※2 厚生労働省「高齢社会に関する意識調査」(平成26年)

※3 平山亮「2014「介護する」息子たち」

※4 中川教「2007「実の娘による」遠距離介護(経験と罪悪感)」



実践女子大学 准教授
やまね すみか
山根純佳さん

略歴

2009年東京大学大学院
人文社会科学系研究科博士
課程修了。

2010年山形大学人文学
部講師、2012年同准教授。

2015年より実践女子大学
人間社会学部准教授
(現在に至る)。

INTERVIEWEE



一般社団法人
福祉システム北海道 代表
高橋 銀司さん

1987年生まれ。北海道斜里郡小清水町出身。福祉業界に興味があり、介護福祉士、社会福祉士を取得。障害者自立生活センターに勤務し、福祉系大学院修士課程修了後、介護福祉士養成校の専任教員となる。退職後30歳の時に福祉従事者支援を中心とした社会的企業を設立。福祉資格養成校や他事業所での講師を行う他、訪問介護事業所の人事やホームヘルパーの働きをしている。



株式会社北陸銀行
ダイバーシティ推進室長
矢田 衣子さん

1964年生まれ。富山県滑川市出身(ほたるいかで有名)。地元の高校を卒業後に北陸銀行に就職。2019年よりダイバーシティ推進室長に就任。銀行員生活の中で様々な人達と出会い、助けられ、子育てをしながら現在に至ります。一人ひとりが”心身ともに健康でイキイキと働きやすく、家庭と仕事の両立ができる環境づくり”を目指す。



ダブルケア専門家
野嶋 成美さん

ダブルケアの支援研究をしているダブルケア専門家。ダブルケアとは介護と子育ての同時進行のことをいい、また、複数のケアをすることもダブルケアという。自身もダブルケアを15年間行ってきた。15年間のダブルケアの経験をもとに、ダブルケアの認知度を高める活動をしている。

INTERVIEW

regarding
nursing care

インタビュー

介護にまつわるあれこれを
3名の方に伺いました。



ダブルケア専門家
野嶋 成美さん
に聞きました。

「ダブルケア」とは何ですか？

ダブルケアとは介護と子育ての同時進行のことをいいます。また、親の介護だけでなく、配偶者の介護と孫の世話、自分の体調が悪い中、誰かのケアをするなど、複数のケアのことも指します。私自身はダブルケアを「我がごと」としてとらえてほしいので、あまり対象を絞らずに活動しているのですが、やはり介護と子育てをメインにお伝えしています。

決して特別な状況のことではないんですね。ご自身もダブルケアを経験されたんですよね。

はい。私の父が2000年の冬に頸椎を損傷し、寝たきりになりました。そこから在宅介護と2人の子どもの育児とのダブルケアが始まりました。途中で母が倒れ、父と母の介護と子育てという状況になります。先に母を、次に父をみとり、同時期に子どもたちが成人してダブルケアを卒業。そのタイミングで横浜のダブルケアサポーターという団体と出会い、ダブルケアという言葉を知り、自分が当事者だったと自覚しました。自分の15年間の経験が役に立っているのではないかと思い、支援している場所を探しましたがどこにもなく、そもそもダブルケアについて知っている人がほとんどいなかったため、認知度を高めるために一人で活動を始めました。

当時の状況を振り返って、どう思われますか？

ダブルケアの15年間は誰かのために生きた15年間です。今思えば周りのたぐさんの人から助けてもらっていたのに、その頃の私は周りが見え

一人で頑張っていると感じていました。その結果、心も体も壊してしまった時期があります。また家庭内のことを一人で抱えてしまっただけで、家族に大変さが伝わっていません。後から知りました。もっと家族と話し合っただけでも、子育ても共有出来ていたら、もう少し楽に過ごせたかもしれません。

地域でダブルケアを支えていくためにどういった支援が必要ですか？

介護や子育てなどのケアをする人(ケアラー)は「話を聞いてほしい」と思っています。ダブルケアはいろいろな問題が複合的に起こっています。自分の頭の整理をするために話を聞いてもらう場所が必要で、できれば買い物に行くように気楽に行ける場で話を聞いてもらい、必要に応じて支援につなげていくことが出来たらいいと思います。

また、介護される当事者をきちんとメンバーに入れて、本人の希望を聞いて、家族と一緒に話し合いをすることを大事にしてほしいです。

残念ながら現状ではダブルケアは女性が一人で抱え込みがちです。介護や子育てを女性が一人で抱え込まないように今後も認知度を高める活動を続けたいと思っています。

あらためて今子育てと介護のダブルケアをしている人たちに伝えたいことはありますか？

子育てや介護は、特に女性が「母だから」「娘だから」「嫁だから」やっただけで、当たり前前と変わらないうえ、子育てと介護も命を守ることで、簡単にできることではありません。まずは当たり前と思わず、一人で抱え込まず、家族と一緒に取り組んでほしいと思います。メインのケアラーをされている方は現場監督になることをお勧めします。子育ても介護も距離感を持つことで、ゆとりができると思うからです。



INTERVIEW
2

株式会社北陸銀行 ダイバーシティ推進室
室長 矢田 衣子 さん
に聞きました。

ダイバーシティ推進室について教えてください。2014年5月にプロジェクトチームができ、2016年4月にダイバーシティ推進室が発足しました。私は今年度から3代目室長として活動しています。従業員一人ひとりが満足できる環境で自分の能力を十分に発揮することを目的に、女性管理者の増加などの女性活躍の育休など男女が共に活動のできる環境づくりをしています。

その一環に介護休暇があるんですね。

はい。法律で定められているとおり、介護休業、介護休暇、短時間勤務の3種類です。介護休業は法律では93日のところ、当行では365日と定めています。要介護者が1人いる場合は年間5日間、2人では10日間取得できる介護休暇は無給ではなく有給とされています。短時間勤務は6時間半、6時間、5時間半の勤務としています。このほかにも積み立て休暇という制度がありまして、一人最長20日間ある有給休暇の使わなかった分を積み立てて、最高60日間休みを使うことができます。ですので、実は今の段階では介護休業を利用した方はいません。状況が落ち着かれるまでは有給などを利用して、その後、長期になる方は短時間勤務などを利用していきます。

この1年間で札幌市内の支店において介護休暇を取得された方が3名ほどいらっしゃるとうつたのですか？全体の取得状況を教えてくださいませんか？

今回お話をいただきましたしまして、現在介護制度を利用していらっしゃる方に対して、アンケートをとり、短時間勤務中の3名介護休暇取得者6名から回答をもらいました。内訳としては40〜50代の、女性のみになりました。やはり女性の方に負担がある現状ののだとわかりました。男性

の方は、おそらく「介護休暇」というこちらの目にわかる形で休んでいないのだと思います。有給休暇を利用して、「介護」という名目でお休みはとっていないので、わからない部分があります。一方で、介護休暇を取得した女性職員からは、通常の休みを申請すると自分のための時間、休暇ととらえられるので、「介護休暇」という形でとった方が、周りにも理解してもらえ、自分自身も気持ちも楽だ、ということで見解がありました。

休暇の取得にあたっての不安や感想、介護と働き方の今後の希望について、当事者の方からのご意見などはありましたでしょうか。

みなさんからは、取得を決めるまでは悩むが、職場に相談する比較的スムーズにとれて、休暇制度自体はものすごくありがたいという声が続々と出てきています。一方で、一部こういう声があるので、組織として再度制度についての周知をしても良かったらより利用しやすくなる、との指摘もありました。本部側も、もっと工夫して発信していかなければいけないと思います。今後とも法律の改正があらわれ、二度見直ししながら「二人ひとりが働きやすい環境づくり」のため取り組み周知していく予定です。



ありがとうございます。最後に社会全体がどうなればより働きやすい環境になるかと考えていますか？

まず介護を考えている人、それから介護を考えている人は、一人では悩まないでください。周りの人の協力を素直に受ける、ということがポイントだと思います。自分一人で頑張ろうと思ったり、自分自身が苦しむだけですし、仮にそれで職場を離れてしまおうと介護オナリーの生活になり、逆にストレスが溜まったり、経済的負担も大きくなるので周囲を頼っていたらダメだかなと思います。そして、社会全体としては女性がかりにそういったものを頼ってほしくないです。男女がお互い協力しあって、家族、職場、みなさんと課題を共有できる社会になったらいいなと思います。

INTERVIEW
3

一般社団法人福祉システム北海道
代表 高橋 銀司 さん
に聞きました。

福祉システム北海道さんの活動はどういったものですか？

福祉システム北海道は2018年に設立し、主に介護福祉士など現場のケアワークをする方々のスキルアップの講座を行っています。現場で日々行うシャンプーンや口腔ケアをプロの美容師や歯科衛生士等から学んで技術向上をし、その先の利用者さんの満足につながることを目指しています。先日も受講者さんから「利用者さんに『シャンプーン』になったね」と言われたら、言ってもらえて開催した効果があったなと思いました。継続して介護技術向上に力を入れていきたいと思っています。

介護する人とされる人の関係性を良くしていったり、介護が必要になった人がスムーズにサービスを受けられるようになるためにはどうしていくべきですか？

時間と信頼関係が一致していると思っています。例えば「介護保険を使わなきゃ」と心のどこかでわかっているお年寄りに対して、今日、初めて会った人が勧めるのと、顔なじみで人となりわかっている人に言われるのでは、説得力が全然違いますよね。一気に答えを出すんじゃなくて、安否確認や定期巡回みたいなことも含めてこの人だったら「信頼できる」「大丈夫だ」という関係性をつくるのが、社会福祉士やソーシャルワーカーの役割だと思います。あとは情報の貧困を無くすこと。知らなかったことで、使えなかったとか、利用が遅れたとかがあるのと利益を被りすぎ、家族側も介護から解放される時間を持つことでリフレッシュされた経験や体験があると始めやすいと思います。プロ側としては、利用者さんと関わるのと同じくらい家族とも接していくべきだと思います。見えないところで、誰がどう困っている

のか、掘り起こしがどれだけできるのかにかかってくると思います。

介護という「娘、妻だから介護をするべき」といった思い込みも聞きますがどうしたら解決していくと思いますか？

話し合うことです。話し合った結果決まっているなら、家族の中で男性が介護しているても女性が介護しているてもどちらも正解です。家族会議をしつかりして、家族の方針を作ることに手間を惜しまないようにしてほしいです。1回話し合っただけで、数カ月後に状況が変わればまた話し合うことが大切ですが、その手間をおろそかにしては基本的には施設などでは同性介護でベースをつくっていくのが求められると考えていますが、異性介護にしてみてもこれまでを任せると、あらかじめ話し合っていくことで互いに嫌な思いをしないという話も聞きます。また、介護職員が利用者さんからセクハラを受けるといふ話も聞きますが、泣き寝入りや我慢して動き続けないかため、職場内でのコミュニケーションやその先にある言いやすい環境づくりが必要で、上司の人も「こんなことされてないか？」って聞いてあげてリスクに備えていかなければいけないですね。



介護職に携わる人たちにどうなっていてほしいですか？

介護は当事者も言っていますが、正解がなく、十人十色です。ですが、正解はあると思うので、やってはいけないことや、不正解をしないで仕事を続けることが正解なんじゃないかなと思います。正解を求めている人からすると苦しいかもしれないけど、「この利用者さんに対しての関わりは、コレで良かったのかなと思うくらいは正解だ」と思います。「この人への介護はコレで良かったのだ」と思い込んでしまふことほど怖いことってないと思うので、悩み続けつつ働きやすいポジションを見つけて、無理なく介護業界に長く居てほしいです。

ESSAY

子育てとばして介護かよ



島影真奈美 著
KADOKAWA

P5でインタビューに応じてくださった野嶋さんのダブルケアは、実親の介護でした。この書籍は、作者の義理親のダブルケアを別居しながら行うというもの。嫁の立場でどのように介護をしたのか。介護を担うかもしれない方や介護初心者が読みやすい内容となっています。笑いと涙で介護を知るエッセイです。

MOVIE

最強のふたり



エリック・トレンダ、オリヴィエ・ナカシュ脚本・監督
ギャガ

事故で障がい者となった主人公とその介護者となった黒人男性とのヒューマンドラマです。介護者は主人公をひとりの人間として接します。そのことで主人公は自然な人間関係が心地よいと感じます。肌の色でなく、障がいの有無でもなく、ふたりはお互いを人として認め合い、信頼し合える関係となっていきます。そのふたりの自然な関係が感じられる映画です。

SOCIOLOGY

私にとっての介護



岩波書店編集部 編著
岩波書店

ご存じのように介護には、障がい者・高齢者・認知症など、様々な症状や状況の方への対応が必要とされています。この1冊はタイトルの通り「私にとっての介護」がつけられています。タレントや国会議員などの著名人の方々が、それぞれの立場や経験で書き上げています。あなたにとって、自分らしい介護を見つけられる作品です。

SOCIOLOGY

迫りくる「息子介護」の時代 —28人の現場から



平山亮 著 上野千鶴子 解説
光文社新書

タイトルを読んで「息子が親の介護？」と思った方も多いことでしょう。しかし、昨今は男性介護者が増えています。その背景を含め、28人の男性介護者から聞き取った内容を基に執筆されています。介護のみならず、妻や兄弟との関係そして仕事、あなたならどうしますか？男性ならではの介護の悩みや苦勞を知って、男性介護者を応援したくなる作品です。

りぶるのススメ

このページではセンター職員がおススメする本・映像作品をご紹介します。
あなたのお気に入りになれたら嬉しいです。

札幌エルプラザ情報センターを知っていますか？

札幌エルプラザ内にある「情報センター」では男女共同参画を含めた4分野の資料を閲覧したり借りたりすることができます(ご利用は無料です)。

🌟マークが付いているものは情報センターで借りることができますので、ぜひ遊びに来て下さいね。

情報センターへのお問い合わせは

011-728-1223

(開館時間 9:00~20:00)
(貸出時間 9:00~19:45)

札幌市男女共同参画センター相談窓口のご案内

札幌市男女共同参画センターでは相談窓口を開設しています。相談料は無料です。各相談では専門の相談員がお話をお伺いし、秘密は固く守ります。相談内容から浮かび上がった問題は、ジェンダーに関わる課題として市民や行政に投げかけ、男女共同参画社会の実現に生かします。

	日 時	相 談 員	相 談 方 法	相 談 内 容
女性のための 総合相談	第1・3 水 10:00~12:00 第2・4 水 18:00~20:00	カウンセラーなど (女性)	面談/電話 (011-728-1225)	・パートナーとの関係や、家庭における性別役割に関わること ・セクシュアリティや恋愛、対人関係に関わること ・職場や地域における性別役割に関わること
女性のための 法律相談	第1・3 金 18:00~20:00	弁護士 (女性)	面談	・DVや離婚、別居に関わること ・職場や地域等でのセクシュアル・ハラスメントなど ・性別を理由とした不当な扱い、嫌がらせなど

予約受付電話:011-728-1255
※完全予約制なので事前にお電話でご予約ください。

編集後記

今回は当誌初となる「介護」をテーマとしました。しかし、テーマを決めた後にコロナ禍となり、「介護崩壊」といった言葉も...。どのように「介護」を取り上げたら良いのか悩みました。私達は介護者が孤立してしまう問題や、家事や育児と同様に女性が担うものとされてしまっているジェンダーの問題を耳にしています。そのため「介護は一人で悩まないで、話し合ってほしい」という強い思いから、ブレずに取り組むことにしました。介護は誰か一人が犠牲になってするものではありません。今号を通して、介護者を家族・地域・職場などが見守り、孤立しない世の中になってほしいと考えています。そして、要介護者にとっても居心地の良い社会にしていきたいです。

新型コロナウイルス感染拡大 特設相談窓口 「女性のためのLINE相談」を 実施しました

札幌市男女共同参画センターでは、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、不安やモヤモヤを打ち明け、女性のためのLINE相談を4月15日(水)から6月30日(火)まで実施しました。期間中のべ300件以上の相談が寄せられました。外出自粛によりパートナーとの関係が悪化したり、子どもにイライラをぶつけてしまうといった声や、感染防止への意識の差から生じる人間関係の悩み、収入の減少に関する相談などが寄せられました。

今回のような非常事態では、「辛いのは自分だけではない」と思い、悩みやモヤモヤを我慢してしまう人が多くいますが、一人で抱え込んでパンクしてしまう前にも悩みを打ち明けて少しでも楽になってもらいたいです。当センターでは今後も女性のための相談窓口を開設していきますので、ぜひご利用ください。

発行月：令和2年9月

発行：札幌市男女共同参画センター

【指定管理者：公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会】

facebook： <https://www.facebook.com/pages/札幌市男女共同参画センター/377759212234904>

所在地：〒060-0808

札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ内

電話：(011)728-1255 FAX：(011)728-1229

ホームページ： <http://www.danjo.sl-plaza.jp>



本誌のタイトル「りぶる」は、英語(ripple)で「さざ波」という意味です。男女共同参画の意識がさざ波のように、少しずつ広がって欲しいという思いを込めました。